生の修因得果に關して述ぶと說かれる。がしかし、『觀經疏』ではこれと相違する『大』・『觀』二經の宗致釋が明かされている。それによると、『大經』では果である淨土について廣く明かして因行は略されており、『觀經』では逆に因行は廣述して淨土の果は略辯するという、相違が認められる。又、往生の因行たる三輩九輩は開合の異とする立場が『觀經疏』では詳述せられているが、『大經疏』では『大經』の上輩を『觀經』の上中品とし、中輩は中上品と中中品に、下輩は下下品に配する相違が指摘しえられる。この他、二疏の組織及び用語の相違について、或は引用經典の比較等に關して、詳細に研究した結果によるとき、現存する嘉祥の『大經疏』は眞撰とは見做され難いように判斷される。

かように『大經疏』が嘉祥作ではないとすると、本著の作者は何人に歸せられるであろうか。引用經典が舊譯のみであることは、玄奘以前の師であろうことを暗示する。又、『大經疏』では『涅槃經』を勝れた經典として取扱つていることは、涅槃學派に所屬する師の作であるかとも考察される。更に、この『大經疏』においては三界攝不說、西方と兜率との優劣論、逆謗攝不論等、これら重要なる論說が漏されている事實は、初期の研究者によつて述作されたことを示唆するものとも見受けられる。なお、『大經疏』における次第敎・偏方敎という敎判論が、すでに嘉祥の『彌勒經遊意』（『大正藏』三八・二六九頁上段）では舊諸師の學說として記載される點などより觀察するに、これは嘉祥以前の師の著書ではなかろうかと考えられる。

佛敎に於ける自殺の問題

菅原大石

佛敎に於ては自殺に自ら自身を殺す自殺と自ら他身を殺す自殺との二種の自殺があります。今余が此處に述べんとする自殺は二種の自殺の中第一の自ら自身を殺す自殺の研究であります。佛敎では自殺を必ずしも罪惡とはしません。羅漢六種の中の第二の思法羅漢は所得の證果が退出せんことを懼れて恒に自害して無餘涅槃に入ろうと思つている。又、佛敎には捨身と云う術語があつて佛道修行の爲めには身命を惜しんではなりません。報恩の爲め慈悲行の爲めには肉を割き身を捨つるを捨身供養と名づけている。釋尊が前生に於て薩埵王子となつて餓虎の餌となり又雪山童子が、諸行無常是生滅法生滅々已寂滅爲樂の後半偈の爲めに羅刹に身を與えしが如きは法の爲めに身命を惜まざる捨身行は自殺と見て差支えはなかろうと思う。又、宗祖が報恩を勸めんが爲めに佛祖の恩德を嘆し給うて「如來大悲の恩德は身を粉にしても報ずべし師主知識の恩德も骨を碎きても謝すべし」とあるのは報恩の捨身行と云うべきであろう。噫々それなのに眞宗僧侶が自殺と云えば一概に罪惡と云う氣が知れない。然るに善見律に「比丘有り婬欲が心を亂すその心を制せんと欲するも制するを能わず自ら念じて言く我れ持戒具足す何んぞ以て戒を捨てて還俗せんや。我れ寧ろ死を取るべし是の故に耆闍崛山の頂に上つて巖に投じて死を取る。佛諸の比丘に告ぐ自ら身を殺すこと莫れ身を殺す者乃至不食の者も亦突吉羅罪

を得べし」とあります。その他五分律四分律には自殺を偸蘭遮罪を結ぶとなし十誦律には自ら形體を毀傷するは突吉羅罪を得るとしてある。此れに依て之を觀れば小乘律では偏に自殺を以て破戒とするけれども大乘では自殺を以て破戒とすることもあれば又菩薩の持戒とすることもある。是の故に天台の菩薩戒義疏及び華嚴の菩薩戒本疏には自ら自身を殺す自殺に三義ありとしてある。一には惡心を以て自ら己身を殺すは重輕垢を得るとし二には假令い善心を以てするも身を厭うて自殺するのも菩薩行ではなく輕垢を得るとし三には法の爲めに身を滅し衆生の爲めに命を捨つるが如きは卽ち持戒であると說いてあります。又法然上人の讃美せる善導大師の捨身往生に就ては大師は觀經に於て古今楷定の疏を作り諸師の中、善導獨り佛の正意を明かにして作すべきを作し遂げたから人間を辭職して彌陀の淨土に御歸りになつたまでのことである。大心海化現の善導大師は生死にも自在を得てござるから死にたい時には死ぬるが生れたい時には生れるのである。故に宗祖は和讃に「大心海より化してこそ善導和尙とおわしけれ末代濁世のためにとて十方諸佛に證をこう世々に善導いでたまい法照少康としめしつつ功德藏をひらきてぞ諸佛の本意とげたもう」と仰せられてあります。十方三世の諸佛の本意を果たし遂げさせられた所の善導大師の捨身往生は決して罪惡ではなくて受生入滅自在の德であります。

哲學と眞宗—世界への道—

佐々木現順

眞宗は世界的であるかという問題に對して私は此れを否定する。その理由は海外遊學三ヵ年に於ける私自身の體驗からである。而もこの體驗からの私の確信は一九五八年日本に催された國際宗教史學會に終始出席していたことによつて學んだ事實によつて今や一層明瞭な左證を與えられているのである。この大會では國際的學者には眞宗學に直面するという興味は全く無であつたからである。佛教學は關心の的となつたが眞宗は國際大會のテーマにはとり上げられなかつたという事實に眼をおおうことは許されない。しかし私はこの事實を却つて深く悅びとするものの一人である。何故なれば學的良心なきデマゴーグは常に歷史によつてくつがえされたという歷史を知つている。又、冷嚴なる洞察は却つて新しい眞宗の在り方を促進するものであるからである。

眞宗は何故に世界的國際的にとりあげられなかつたか。では將來、世界性を獲得するために如何に裝備してあらねばならないか。

先ず國際的にならなかつた理由に二つがある。第一の理由は民族性ということである。ヨーロッパと一口に言つても英國・ドイツを中心とするゲルマン國家とスペイン・フランス・イタリーを中心とするラティン國家とは丁度日本人とインドネシア人程の民族性の相違がある。文化的には同一文化圈だが我々は宗教は文化ではないことを知つている。宗教は民族の本能に關わる。佛教の教えるところの何らかの足だまり Beruhendes Dasein の崩壞は彼等にとつて死を意味する。從つて佛教學を文化の對象とはするが宗教とすることは考えることさえ不可能